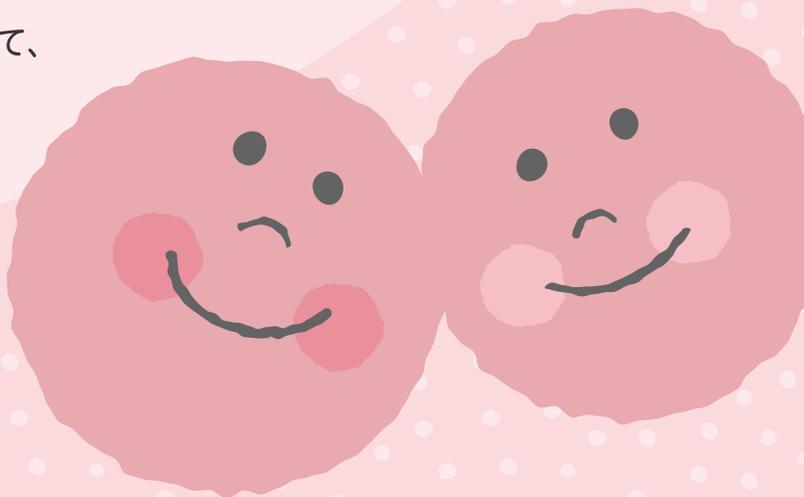


第2回 子ども生活実態基本調査

小4生～高2生を対象に

子どもたちの意識や生活実態は、
どのように変化しているのだろうか？

このレポートは、2009年に
小4生～高2生の計13,797名に対して
実施したアンケート調査の結果です。
第1回調査(2004年に実施)からの
子どもたちの変化を明らかにすることができます。
今回の調査では、子どもたちの
人間関係や将来展望などで、
興味深い結果がみられました。
調査結果をもとにして、
子どもたちの自立、未来について、
一緒に考えてみませんか。



調査概要

- 調査テーマ 小学生・中学生・高校生の生活に関する実態や意識をとらえる
- 調査方法 学校通しの質問紙による自記式調査
- 調査時期 第1回調査（2004年調査） 2004年11月～12月
第2回調査（2009年調査） 2009年8月～10月
- 調査対象 小学4年生～高校2年生

【小学生】	2004年調査：4,240名（21校）	2009年調査：3,561名（18校）
【中学生】	2004年調査：4,550名（13校）	2009年調査：3,917名（12校）
【高校生】	2004年調査：6,051名（13校）	2009年調査：6,319名（13校）
【合計】	14,841名	13,797名

※2004年調査では、調査対象者が生活する都市の規模によって回答に偏りが生じないように、あらかじめ市区町村の人口密度と人口規模を考慮した3つの地域区分を設定し、サンプリングを行っている。

具体的には以下のような方法を採用している。

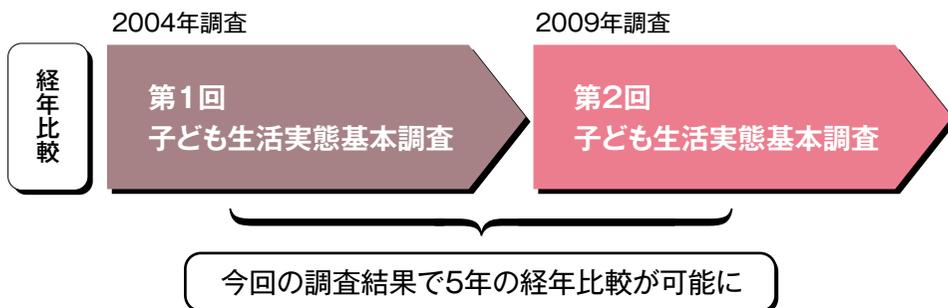
- ・市区町村の人口密度と人口規模を考慮して、3つの地域区分を設定。
「大都市」（東京都内）、「中都市」（中規模都市：人口密度が中／人口規模が20～30万人程度）、
「郡部」（町村部：人口密度が低／人口規模が1～2万人程度）
- ・各地域区分に該当する市区町村のなかから、ランダムに複数抽出。
- ・抽出した市区町村から、さらにランダムに学校を抽出し、調査を実施。

※今回の2009年調査では経年での比較や地域による違いをみるため、2004年調査と同一の学校に調査を依頼した。一部、調査対象校に入れ替わりがあるが、追加校については市区町村の人口密度や人口規模、高校については学校の入学難易度を考慮したうえで有意に抽出した。

※なお、本文中の「小学生」は小4生～小6生、「中学生」は中1生～中3生、「高校生」は高1生～高2生を指している。

- 調査項目 日ごろの生活（生活時間、放課後の生活など）／学習の様子／親子関係、友だち関係／将来展望／自分自身について／メディアとの接触／小さいころからの体験 など

●本調査の枠組み



世の中の動き
(景気、メディアなど)

教育関連年表

不景気

2004年 「ニンテンドーDS」販売
「プレイステーションポータブル」販売

景気回復・雇用増加

2006年 「Wii (ウィー)」販売

2008年 リーマン・ブラザーズが破綻

再び不景気に突入

2009年 民主党・社会民主党・国民新
党の連立政権が誕生

2002年 文部科学省による「学びのすすめ」公表
完全学校週5日制導入
小・中学校で「学習指導要領」の実施
・授業時数の削減
・絶対評価の導入

2003年 高等学校で「学習指導要領」の実施

2004年 国立大学の法人化
PISA2003、TIMSS2003 結果公表

2006年 教育再生会議の設置
「早寝早起き朝ごはん」全国協議会設立

2007年 「全国学力・学習状況調査」の実施
PISA2006 結果公表

2008年 中教審「学習指導要領等の改善について」答申
中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」審議

2009年 「新学習指導要領」への移行措置開始(小・中学校)
・「生きる力」の育成
・基礎基本と活用力の重視
・授業時数の増加
・小学校高学年に「外国語活動」導入

2011年 小学校で「新学習指導要領」実施予定
2012年 中学校で「新学習指導要領」実施予定
2013年 高等学校で「新学習指導要領」実施予定

学力低下論争・学習離れ

第1回子ども生活実態基本調査

教育格差

第2回子ども生活実態基本調査

目次

1. 親子関係 4	4. メディア 12
親との会話／親とのかかわり	ゲーム／本・新聞／パソコンの使用頻度／ 携帯電話の使用状況
2. 友だち関係 7	5. 生活の満足度 16
友だちの数／友だちとのかかわり	
3. 生活習慣 10	6. 将来展望 17
起床時刻・就寝時刻／食事の様子	将来像／なりたい職業の有無／ 職業ランキング

1. 親子関係

親との会話

父親との会話、母親との会話が増えている

5年前に比べて、父親との会話、母親との会話の頻度が高まった。とくに「友だちのことについて」を話題にする比率は、中学生では父親と7.3ポイント、母親と9.2ポイントと、増加幅が大きい。一方、「将来や進路のことについて」などの会話はあまり増加しておらず、高校生では若干減少している。

Q あなたは次のようなことについて、お父さんやお母さんとどのくらい話をしますか。

図1-1 「学校のでできごとについて」の会話（経年比較 学校段階別）

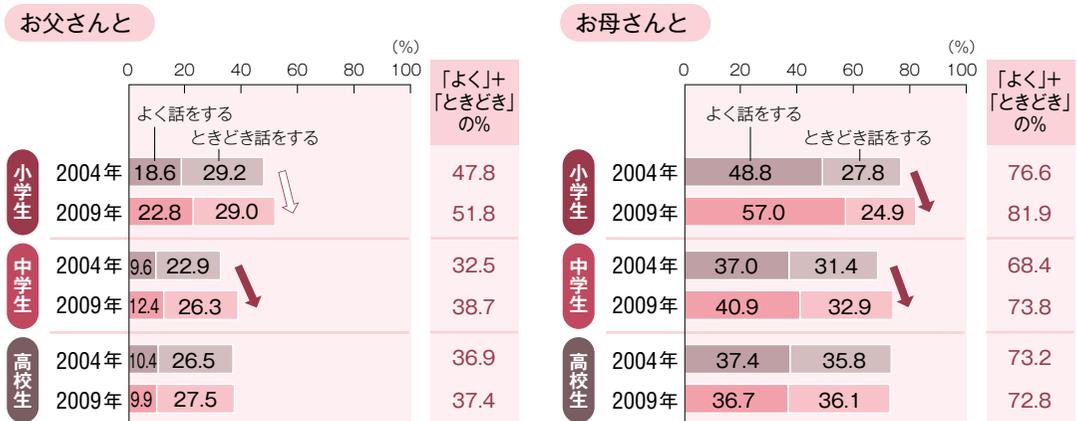


図1-2 「友だちのことについて」の会話（経年比較 学校段階別）



1. 親子関係

図1-3 「将来や進路のことについて」の会話（経年比較 学校段階別）

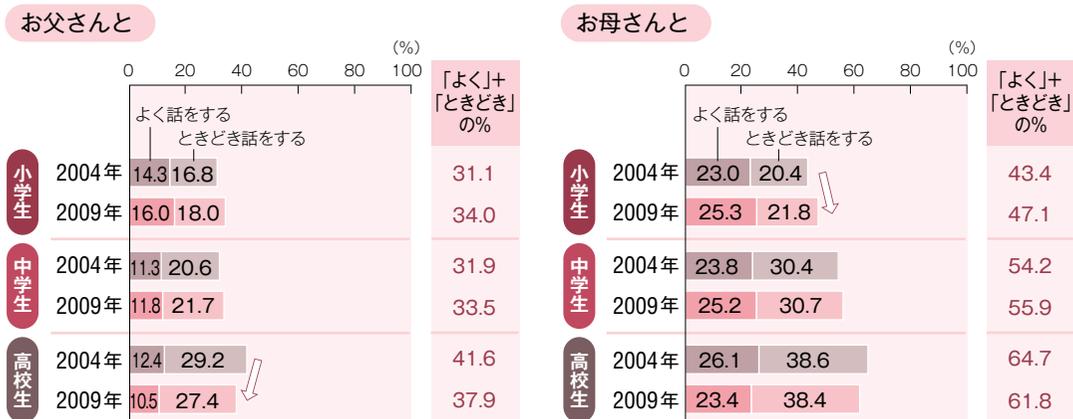
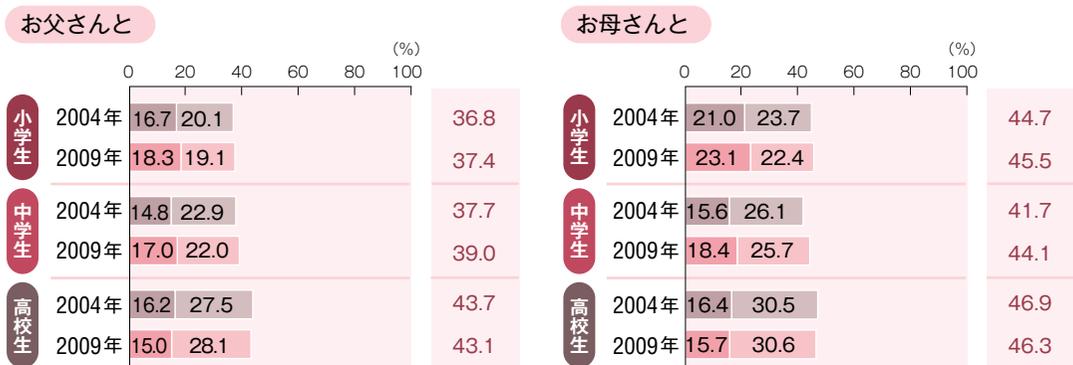


図1-4 「勉強や成績のことについて」の会話（経年比較 学校段階別）



図1-5 「社会のできごとやニュースについて」の会話（経年比較 学校段階別）



注) ➡は5ポイント以上増加した項目、⇄は3ポイント以上増減した項目。

1. 親子関係

親とのかかわり

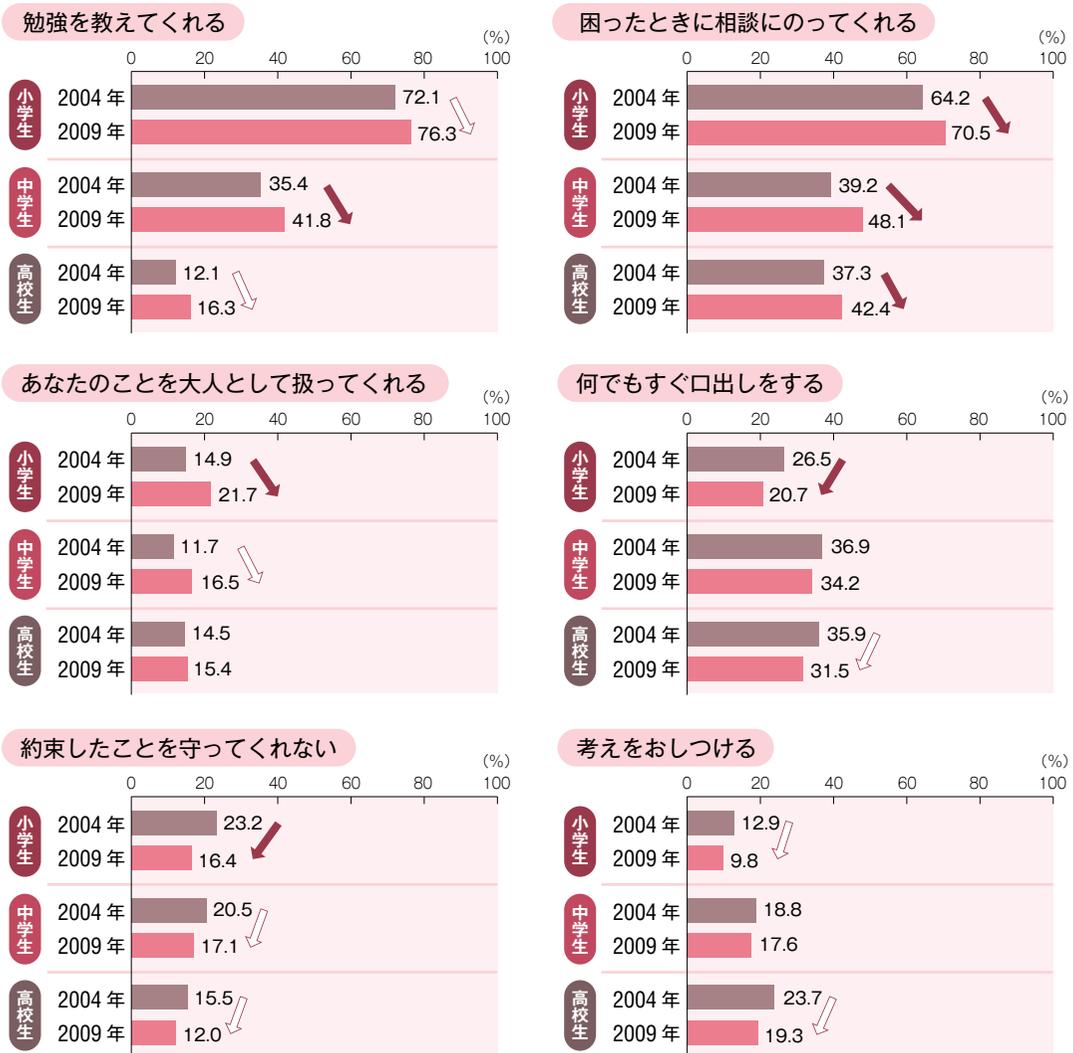
肯定的なかかわりが増加、否定的なかかわりは減少

「勉強を教えてくれる」「困ったときに相談にのってくれる」は、小・中・高校生とも選択する比率が増加。一方、「何でもすぐ口出しをする」「約束したことを守ってくれない」といった否定的なかかわりについては、選択する比率が減少している。



親との関係について、次のようなことはあてはまりますか。(複数回答)

図1-6 親とのかかわり(経年比較 学校段階別)



注) → は5ポイント以上増減した項目、⇨は3ポイント以上増減した項目。

2. 友だち関係

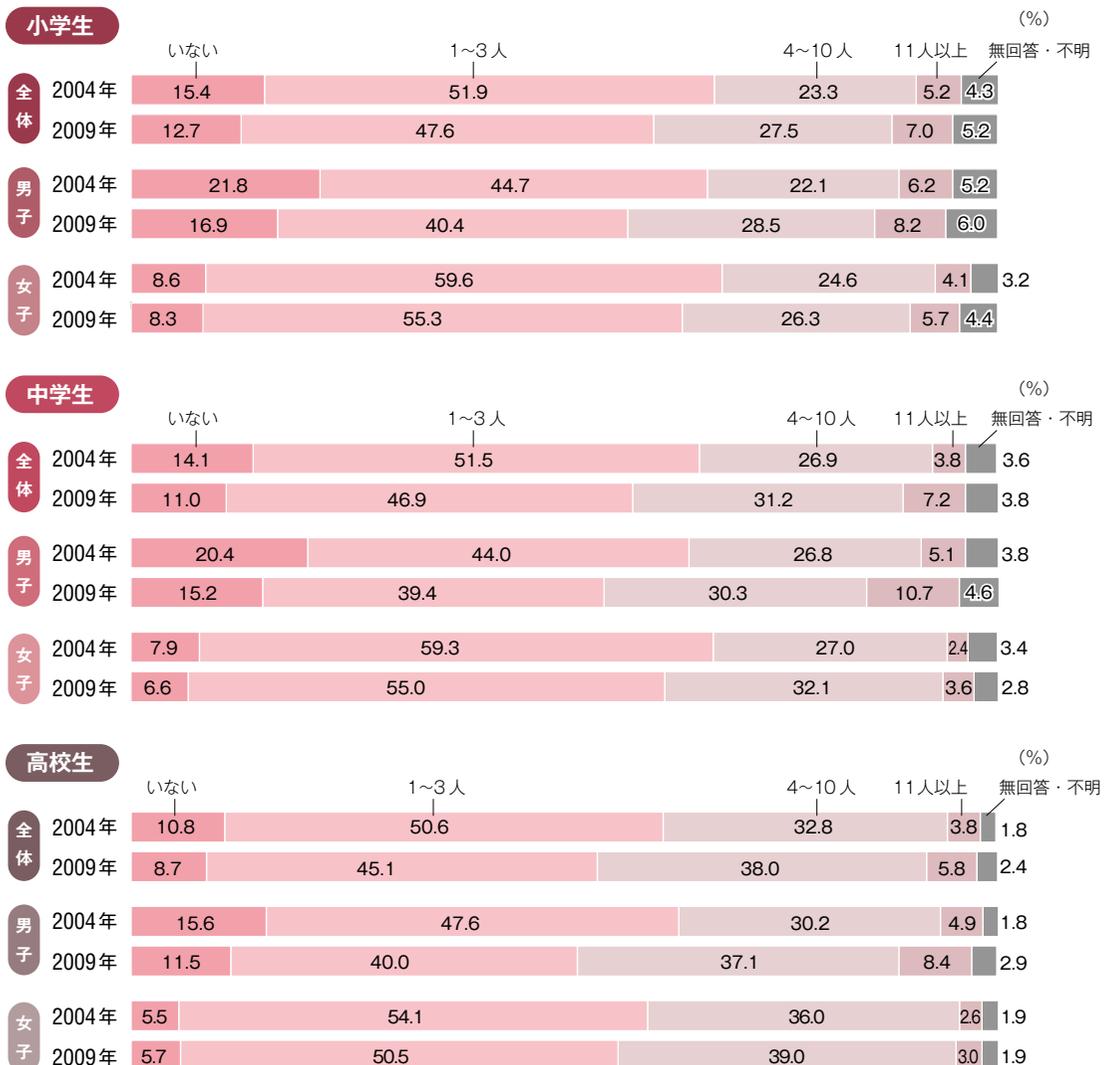
友だちの数

「悩みごとを相談できる友だち」が増えている

「悩みごとを相談できる友だち」が「4人以上」（「4～10人」＋「11人以上」）いると回答した小学生は34.5%、中学生は38.4%、高校生は43.8%となっており、いずれも2004年に比べて5ポイント以上増加している。性別で見ると、女子より男子のほうが増加幅が大きい。

Q 次のような友だちは、全部で何人くらいいますか。

図2-1 「悩みごとを相談できる友だち」の数（経年比較 学校段階別・性別）



注) 「1~3人」＝「1人」＋「2~3人」、「4~10人」＝「4~6人」＋「7~10人」、「11人以上」＝「11~20人」＋「21人以上」。

2. 友だち関係

友だちとのかかわり

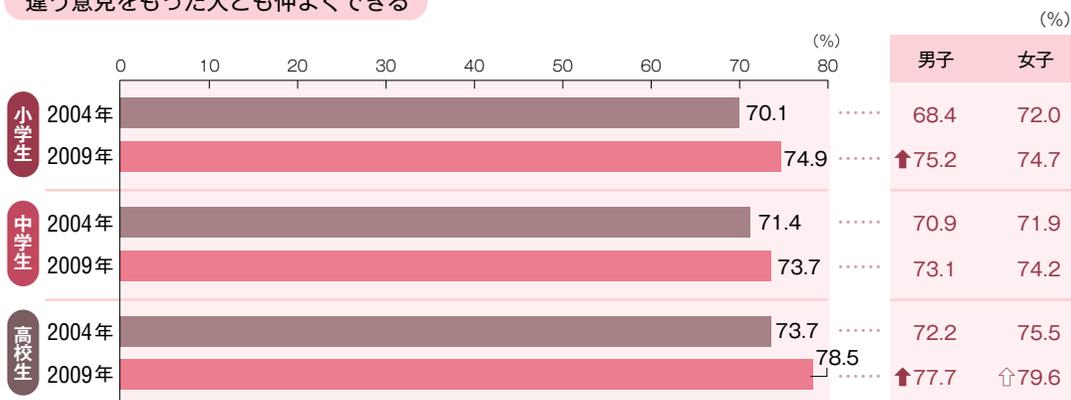
「話を合わせる」男子が大きく増加

2004年に比べて、「違う意見をもった人とも仲よくできる」「友だちが悪いことをしたときに注意する」と回答する割合が増加している。「仲間はずれにされないように話を合わせる」は男子の増加幅が大きく、今回は中・高校生で女子よりも肯定率が高くなった。

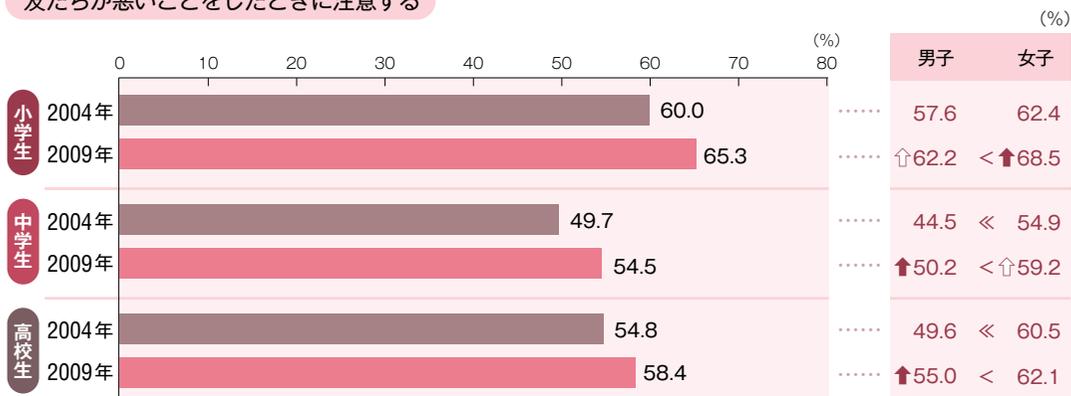
Q 友だちとの関係について、次のようなことはどのくらいありますか。

図2-2 友だちとのかかわり（経年比較 学校段階別・性別）

違う意見をもった人とも仲よくできる

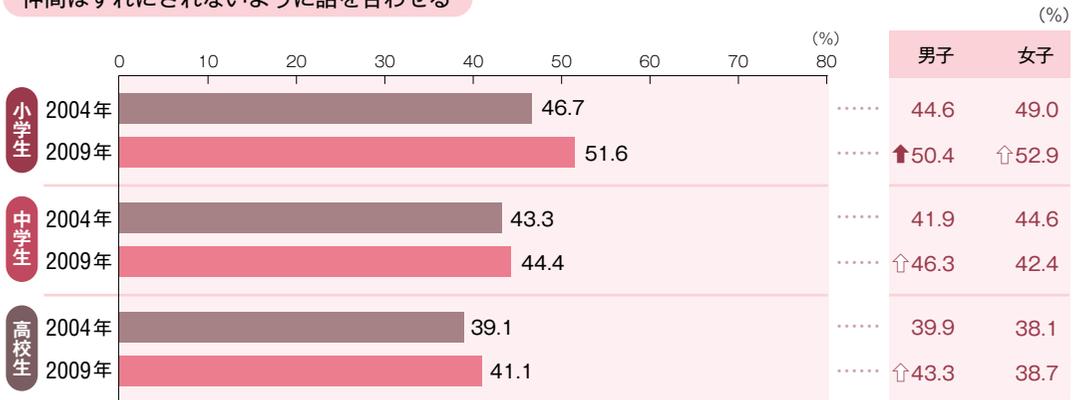


友だちが悪いことをしたときに注意する

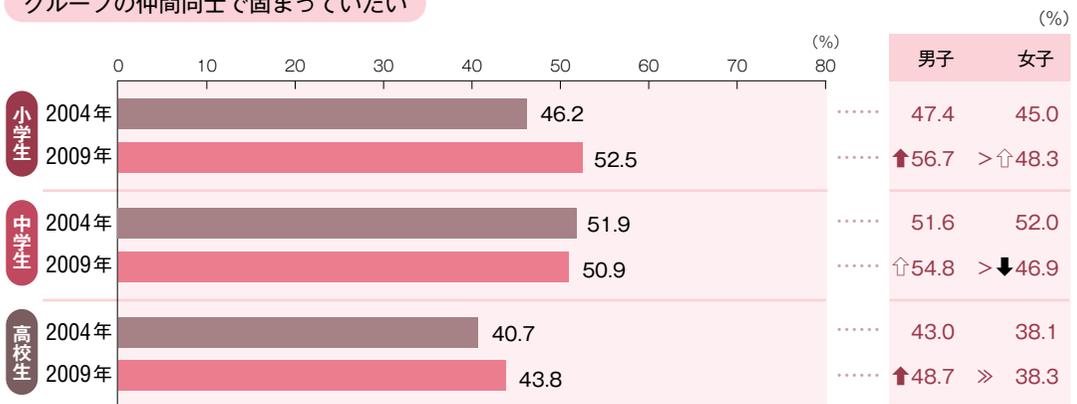


2. 友だち関係

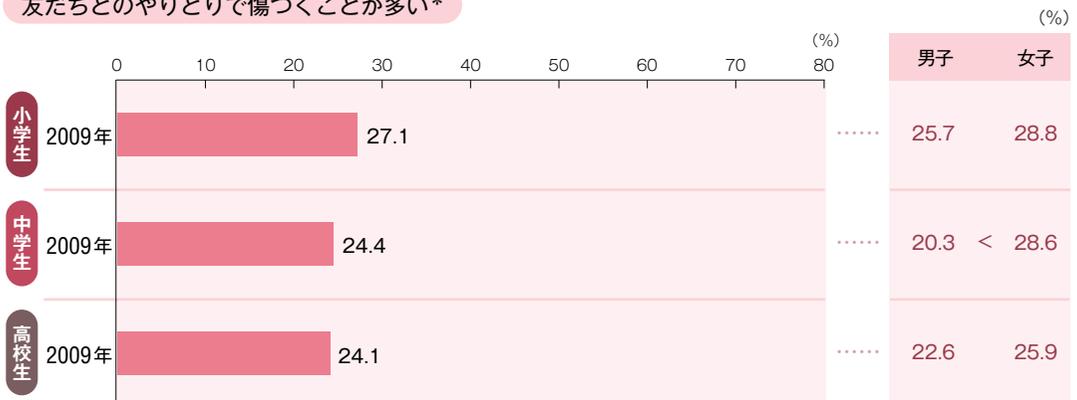
仲間はずれにされないように話を合わせる



グループの仲間同士で固まっていたい



友だちとのやりとりで傷つくことが多い*



注1) 「とてもそう」 + 「まあそう」の%。

注2) ↑↓は5ポイント以上増減した項目、↑は3ポイント以上増加した項目。また、男子と女子との間で5ポイント以上差がある場合は<>、10ポイント以上差がある場合は<<>>で示している。

注3) *は2009年調査のみでたずねている。

3. 生活習慣

起床時刻・就寝時刻

2004年よりも早寝早起きになった

小学生では「7時以前」*に起床する子どもが53.3%から70.1%へと16.8ポイント増加した。また「23時以降」*に就寝する子どもは26.3%から21.4%へと減少した。いずれの学校段階でも、早寝早起きの傾向が強まっている。*「7時以前」は「6時より前」～「6時30分ごろ」までの合計。「23時以降」は「23時ごろ」～「2時よりあと」までの合計。

Q 平日（学校がある日）の「朝、起きる時間」と「夜、寝る時間」は、だいたい何時ごろですか。

図3-1 起床時刻（経年比較 学校段階別）

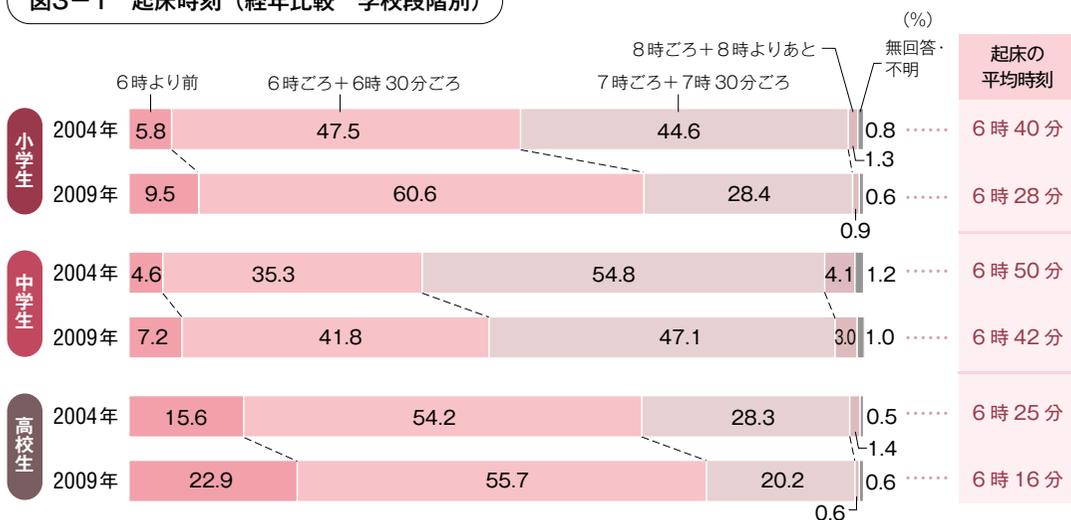
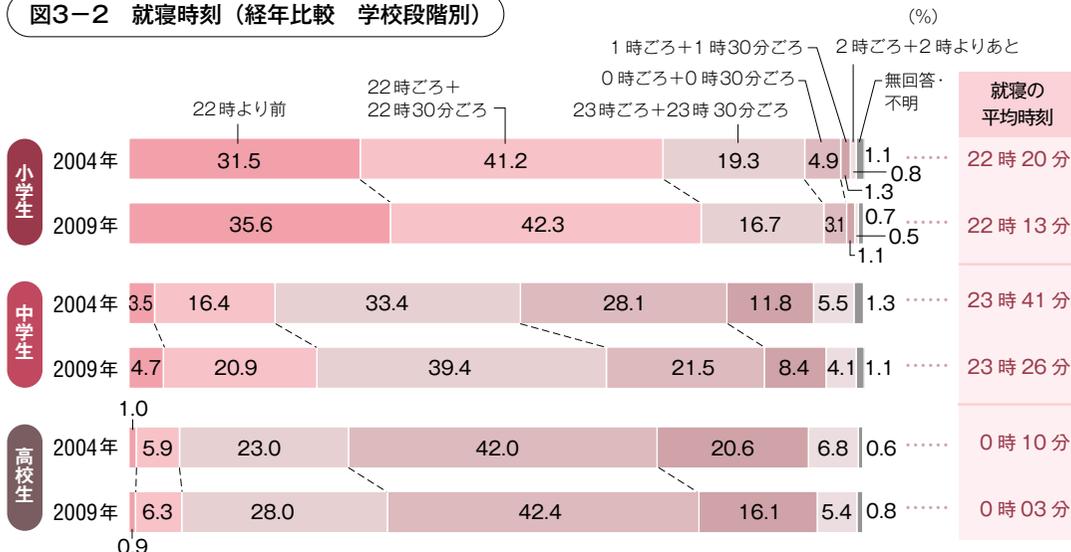


図3-2 就寝時刻（経年比較 学校段階別）



注) 起床・就寝の平均時刻は「22時より前」を「21時30分」、「2時よりあと」を「2時30分」のように置き換えて算出した。無回答・不明は除外。

食事の様子

朝食を食べる子どもが増えた

「朝食をとらないで学校に行く」の比率が減少している。「好きなものだけを食べて、嫌いなものを残す」「栄養ドリンクやサプリメントを飲む」も減少しており、食事に気をつかうようになった。しかし、中・高校生では「ダイエットのために食べる量を減らす」が増加している。

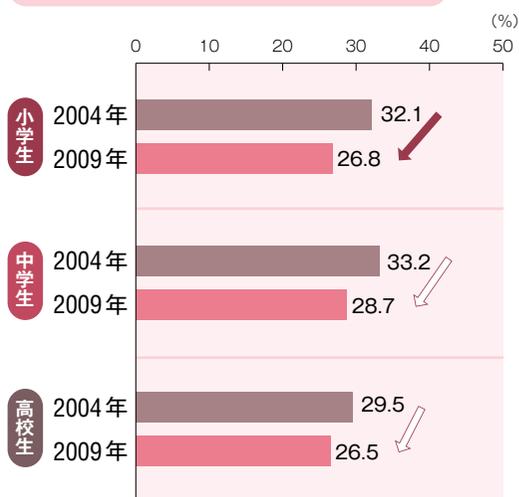
Q 毎日の食事のなかで、次のようなことはどれくらいありますか。

図3-3 食事の様子（経年比較 学校段階別）

朝食をとらないで学校に行く



好きなものだけを食べて、嫌いなものを残す



栄養ドリンクやサプリメントを飲む



ダイエットのために食べる量を減らす



注1) 「よくある」+「ときどきある」の%。

注2) ➡は5ポイント以上減少した項目、⇨は3ポイント以上増減した項目。

4. メディア

ゲーム

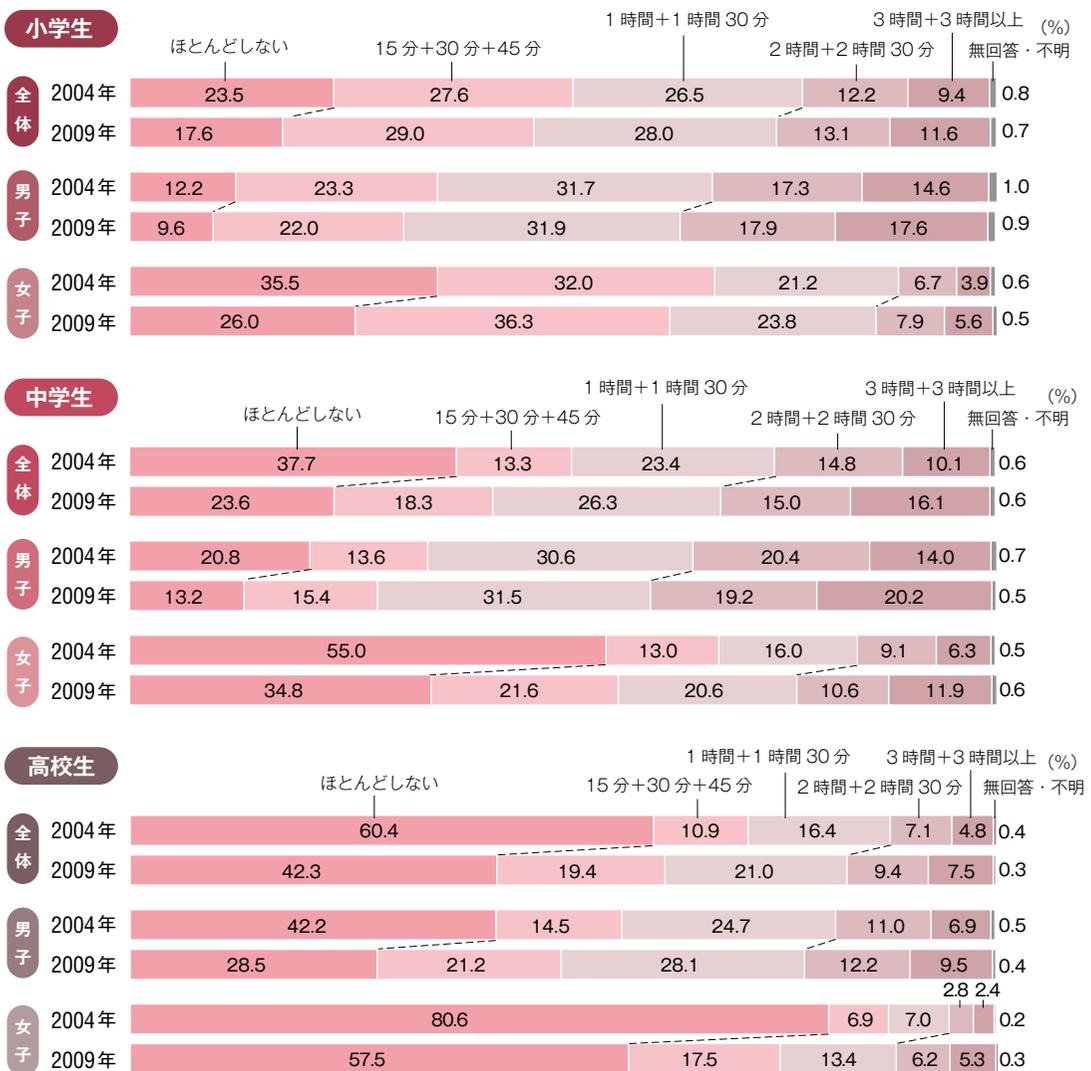
ゲームをする子どもが増加

テレビゲームを「ほとんどしない」子どもが減った。とくに女子では、「ほとんどしない」の比率が、小学生で35.5%から26.0%、中学生で55.0%から34.8%、高校生で80.6%から57.5%と、大きく減少している。



あなたは、ふだん次のようなことをどれくらいしますか。1日のだいたいの時間を教えてください。

図4-1 テレビゲームをする時間（経年比較 学校段階別・性別）



注) テレビゲームは「テレビゲーム(パソコンゲーム、携帯型ゲーム機、携帯電話のゲームを含む)」としてたずねている。

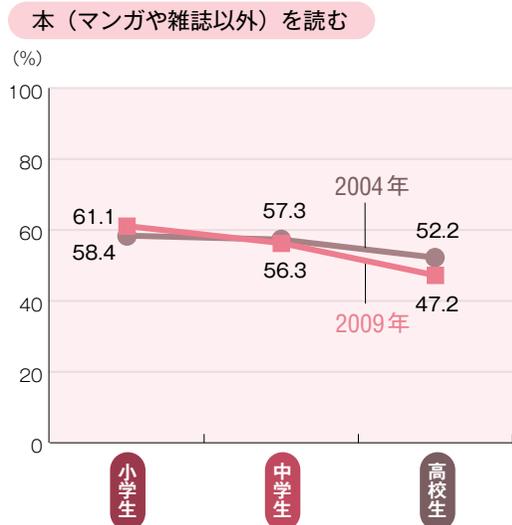
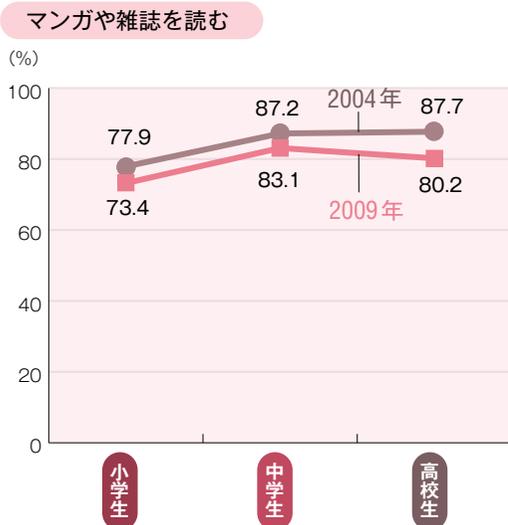
本・新聞

高校生が本や新聞を読む頻度は減少

高校生では、「マンガや雑誌を読む」が87.7%から80.2%へ、「本を読む」が52.2%から47.2%へ、「新聞の記事を読む」が44.8%から33.0%へと減少し、本や新聞に触れる機会が少なくなっている。小・中学生でも横ばいか減少傾向にある。

Q あなたは、ふだん次のようなことをすることがどれくらいありますか。

図4-2 本や新聞を読む頻度（経年比較 学校段階別）



注) 「よくある」+「ときどきある」の%。



4. メディア

パソコンの使用頻度

家でパソコンを使用する中・高校生が増加 小・中学生では学校での使用頻度が減少

家でパソコンを使用する生徒は、中・高校生で約6割であり、2004年よりも10ポイント近く増加している。学校では小・中学生で「ほとんど使わない」割合が増加し、7割を超えた。

Q あなたは、1週間にどれくらいパソコンを使いますか。

図4-3 家でのパソコン使用（経年比較 学校段階別）

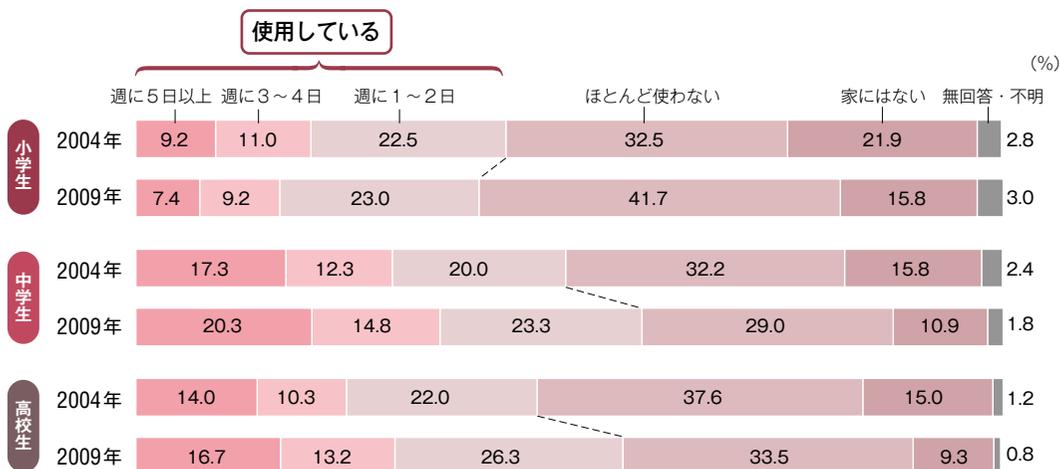
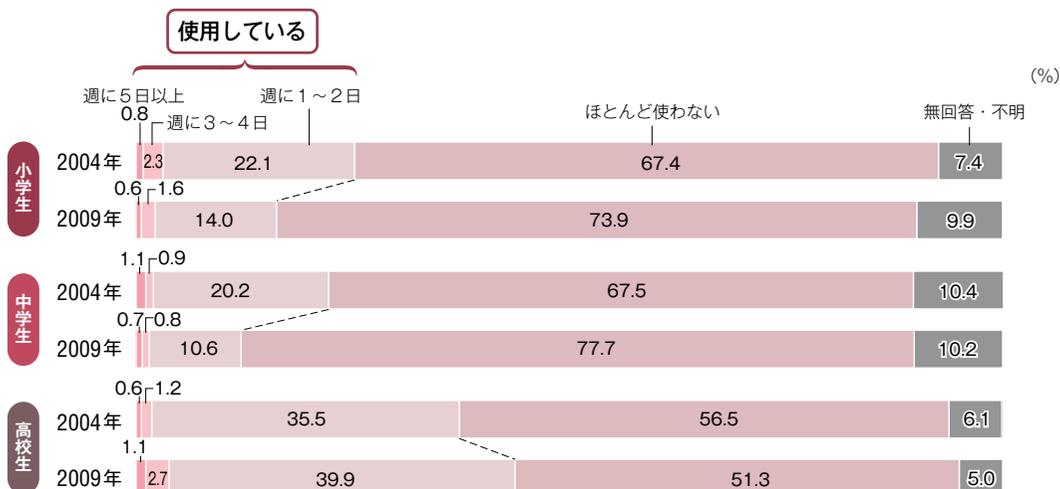


図4-4 学校でのパソコン使用（経年比較 学校段階別）



携帯電話の使用状況

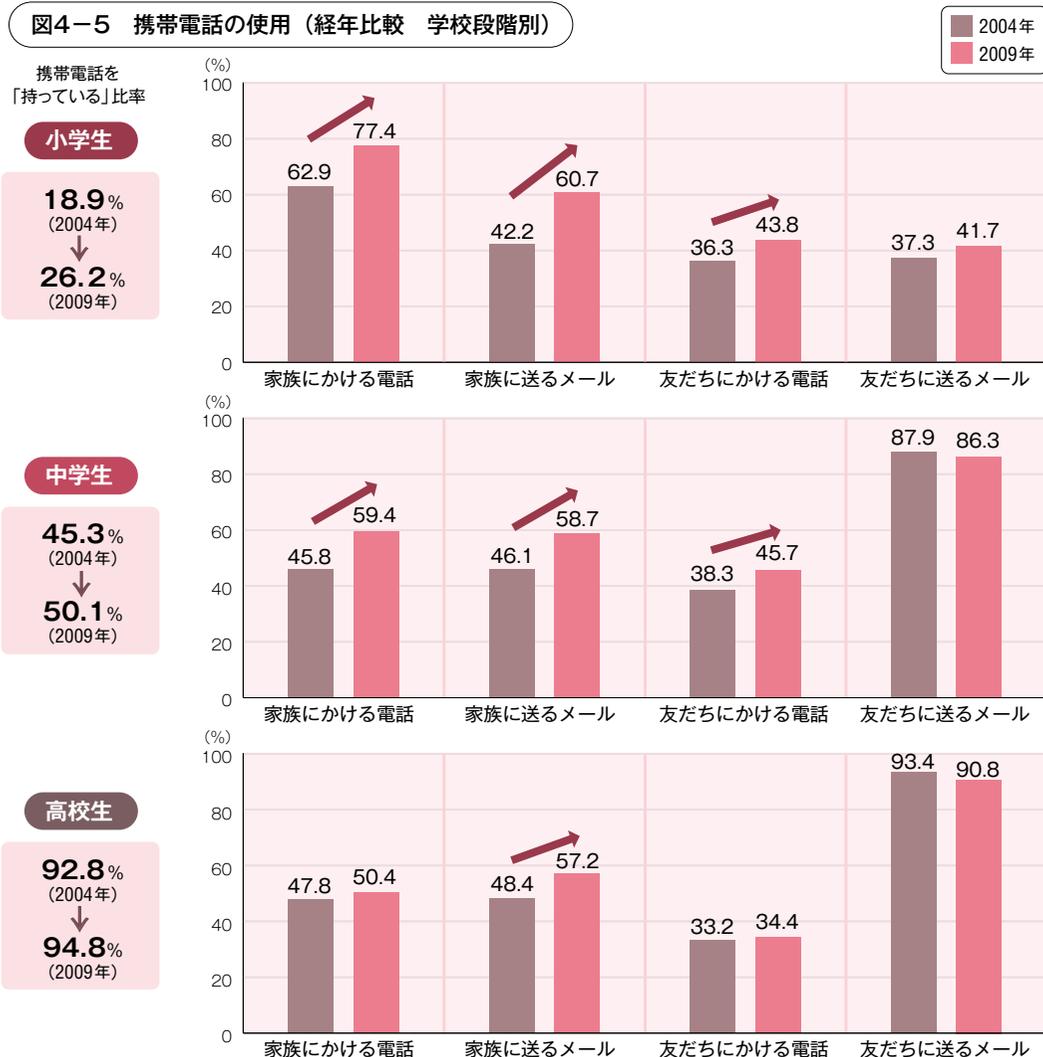
家族と電話やメールをする子どもが増加

携帯電話を持っている子どもが増加し、小学生で4人に1人、中学生で半数になった。その使用頻度をたずねたところ、「家族にかける電話」や「家族に送るメール」をする子どもが増加している。



あなたは携帯電話（ケータイ）を持っていますか。
(持っている人にお聞きします)1日のうちで携帯電話（ケータイ）をどのくらい使いますか。

図4-5 携帯電話の使用（経年比較 学校段階別）



注1) 携帯電話を「持っている」と回答した人のみ対象。

注2) 「1～2回くらい」+「3～5回くらい」+「6～10回くらい」+「11～20回くらい」+「21～50回くらい」+「51回以上」の。

注3) → は5ポイント以上増加した項目。

注4) 2004年・2009年とも、一部の学校で「無回答・不明」が多かったため、学校単位で集計から除外している。

5. 生活の満足度

生活の満足度

生活に対する満足度は上昇傾向

「友だちとの関係」「家族との関係」「学校の先生との関係」といった人間関係や、「自分が住んでいる地域」「今の日本の社会」など自分を取り巻く環境に対する満足度が、小学生から高校生まで通じて上昇している。

Q あなたは、次のようなことについてどの程度満足していますか。

図5-1 生活の満足度（経年比較 学校段階別）



注1) 「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

注2) →は5ポイント以上増加した項目。

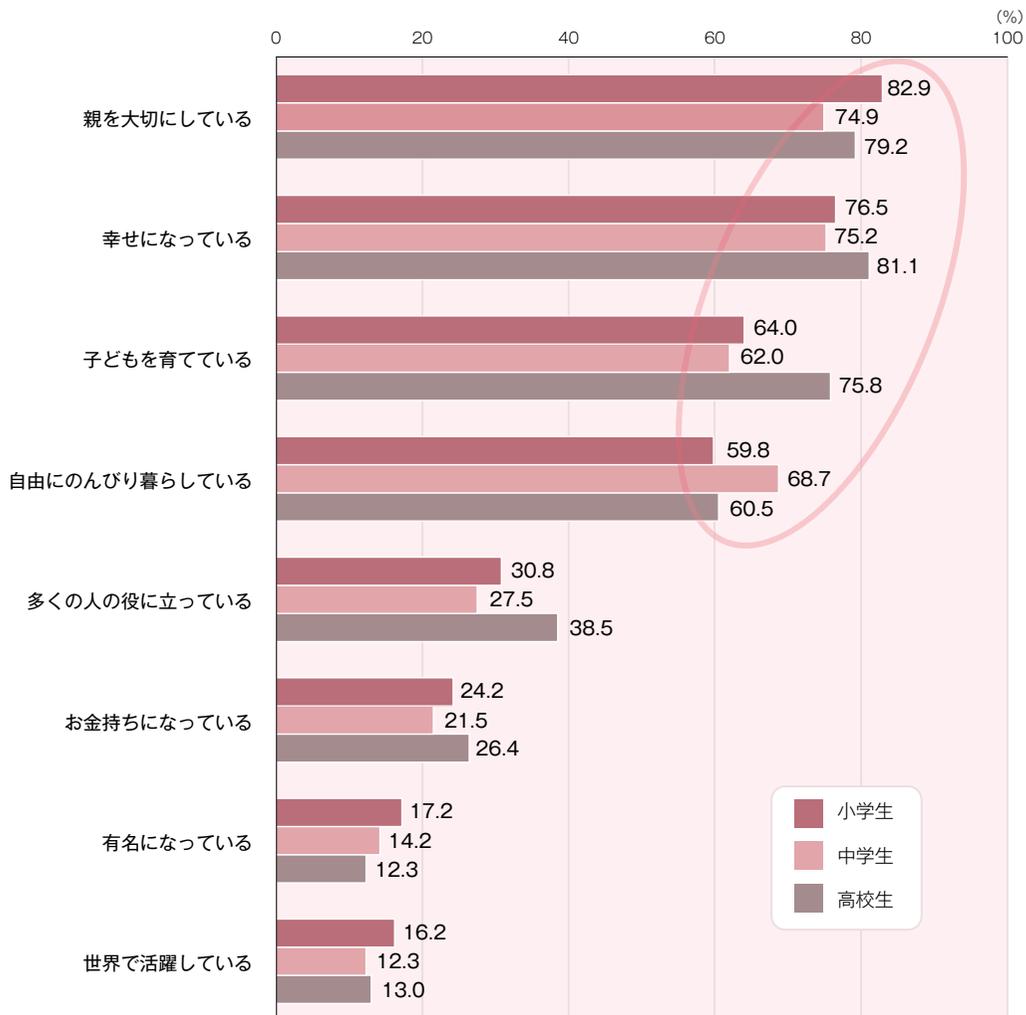
将来像

「世界で活躍している」「有名になっている」よりも身近で現実的な将来を描いている

「親を大切にしている」「幸せになっている」「子どもを育てている」「自由にのんびり暮らしている」といった身近で現実的な将来をイメージする子どもが、学校段階を問わず6～8割程度いる。その一方で「世界で活躍している」「有名になっている」といった将来をイメージする子どもは2割を下回る。

Q あなたが40歳くらいになったとき、次のようなことをしていると思いますか。

図6-1 将来像（学校段階別）



注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) この質問項目は2009年調査のみでたずねている。

6. 将来展望

なりたい職業の有無

なりたい職業が「ある」子どもが減少している

2004年に比べて、なりたい職業が「ある」と回答した子どもが減少している。とくに高校生において減少幅が大きく、2004年に比べて15ポイント以上の減少がみられた。

Q あなたには、将来なりたい職業はありますか。

図6-2 なりたい職業の有無（経年比較 学年別）



注) なりたい職業が「ある」と回答した%。

職業ランキング

「芸能人」の人气が上昇、安定した職業も堅調

男子のなりたい職業の第1位は、小・中学生で「野球選手」、高校生で「学校の先生」。女子は小学生で「ケーキ屋さん・パティシエ」、中・高校生で「保育士・幼稚園の先生」。2004年と比べ「芸能人」の人气が高まっているものの、中・高校生で安定した職業を志望する傾向に変化はない。



あなたが一番なりたい職業を、具体的に書いてください。

表6-1 小学生のなりたい職業ベスト10 (性別)

※↑↓は2004年から5つ以上順位が変化した職業

小学生男子			小学生女子				
		%	順位 (2004年)		%	順位 (2004年)	
1	野球選手	10.4	1	1	ケーキ屋さん・パティシエ	6.6	5
2	サッカー選手	6.3	2	2	保育士・幼稚園の先生	6.4	1
3	医師	2.0	3	3	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	4.7	4
4	研究者・大学教員	1.9	4	4	看護師	3.4	2
4	大工	1.9	4	5↑	デザイナー・ファッションデザイナー	3.3	11
4	ゲームクリエイター・ゲームプログラマー	1.9	7	6	医師	2.5	8
7↑	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	1.6	14	7	理容師・美容師	2.3	7
8	バスケット選手	1.4	9	7↓	マンガ家・イラストレーター	2.3	2
9	調理師・コック	1.3	8	9	学校の先生	2.2	6
9	会社員	1.3	12	10	ペットショップ	1.8	12

表6-2 中学生のなりたい職業ベスト10 (性別)

中学生男子			中学生女子				
		%	順位 (2004年)		%	順位 (2004年)	
1	野球選手	4.6	1	1	保育士・幼稚園の先生	9.5	1
2	サッカー選手	3.4	2	2	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	5.6	4
3↑	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	1.7	8	3↑	ケーキ屋さん・パティシエ	3.5	8
4	学校の先生	1.6	3	4	看護師	2.9	2
5↑	調理師・コック	1.5	11	5	マンガ家・イラストレーター	2.8	3
6↑	研究者・大学教員	1.4	11	6	デザイナー・ファッションデザイナー	2.5	9
6	医師	1.4	4	7	動物の訓練士・飼育員	2.1	7
6	公務員(学校の先生・警察官などは除く)	1.4	5	7	理容師・美容師	2.1	5
9	ゲームクリエイター・ゲームプログラマー	1.1	8	9	学校の先生	1.8	6
10	コンピュータープログラマー・システムエンジニア	1.0	13	10↑	医師	1.2	圏外
10↑	大工	1.0	15				

表6-3 高校生のなりたい職業ベスト10 (性別)

高校生男子			高校生女子				
		%	順位 (2004年)		%	順位 (2004年)	
1	学校の先生	4.7	1	1	保育士・幼稚園の先生	5.3	2
2	公務員(学校の先生・警察官などは除く)	3.6	2	2	学校の先生	5.1	1
3	研究者・大学教員	2.7	7	3	看護師	4.8	3
4	医師	2.3	3	4	薬剤師	2.9	4
5↑	コンピュータープログラマー・システムエンジニア	1.7	12	5	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士	2.4	5
6	警察官	1.4	6	6	公務員(学校の先生・警察官などは除く)	2.3	6
6	薬剤師	1.4	5	6	医師	2.3	7
8	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	1.3	11	8	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	1.5	12
9↓	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士	1.1	4	9	栄養士	1.3	8
9	技術者・エンジニア	1.1	8	10	カウンセラー・臨床心理士	1.2	10
9	法律家(弁護士・裁判官・検察官)	1.1	9				

注) 将来なりたい職業名を具体的に書いてもらった結果を分類して作成した。明確な職業名に分類できないものは除外している。また、比率(%)はなりたい職業が「ない」と回答した人や無回答だった人も母数に含めている。

第2回子ども生活実態基本調査

調査企画・分析メンバー

武内 清	上智大学教授
古賀 正義	中央大学教授
櫻井 茂男	筑波大学大学院教授
黒沢 幸子	目白大学教授
長沼 葉月	首都大学東京准教授
浜島 幸司	新潟大学特任准教授
元森 絵里子	明治学院大学専任講師
谷田川 ルミ	上智大学大学院博士後期課程
木村 治生	Benesse教育研究開発センター教育調査課長
邵 勤風	Benesse教育研究開発センター研究員
宮本 幸子	Benesse教育研究開発センター研究員
佐藤 昭宏	Benesse教育研究開発センター研究員

※所属・肩書きは、刊行時のものです。

Benesse® 教育研究開発センター で実施している各種調査結果は、

<http://benesse.jp/berd/>

または で検索できます。

★「第2回子ども生活実態基本調査報告書」は2010年5月刊行予定です。

本調査の詳細な分析をまとめた報告書を2010年5月に刊行する予定です。刊行次第、上記WEBサイトの「調査・研究データ」内で公開いたしますので、ぜひご覧ください。

●お問い合わせ先 ————— 本調査に関するご意見・ご感想・お問い合わせは、下記までお願いいたします。

〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー 22階

(株)ベネッセコーポレーション

Benesse教育研究開発センター

教育調査課「第2回子ども生活実態基本調査」係

「第2回子ども生活実態基本調査」速報版

発行日：2010年3月10日 発行人：新井健一 編集人：原 茂

発行所：(株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター

9BB043